



日本語の多様な食感表現

ひょうげん



しっとりしたパン、しゃきっとしたサラダなど、私たちは日々の会話で食感を表現する言葉を何気なく使っています。最近の調査研究により、日本語には食感を表す言葉が445語もあることがわかりました。ちなみに、英語やド

イツ語では約100語だそうです。なぜ日本語には食感表現が多いのでしょうか？

◆日本語には食感を表す擬音語や擬態語が多い

その理由の一つは、日本語の言語の特徴に見いだせます。日本語には外国語より擬音語・擬態語が多く、食感表現445語のうち約70%を占めています。そのため外国語では1語で表現される食感が、日本語ではいくつもの言葉に訳されることがあります。

例えば、英語で歯ごたえを



表す「クリスピー」という言葉を日本語に訳すと、食べ物に^{おもう}応じて「サクサク」「パリパリ」「シャキシャキ」「カリカリ」といった4語になります。天ぷらのサクサク感やサラダのシャキシャキ感を表現する言葉が同じなのは、日本人には^い違和感があるかもしれませんね。

◆日本人は食感に対する意識が高い

食感表現が多いもう一つの理由は、食感に対する日本人



の意識の高さにあると考えると考えられています。日本は海や山に囲まれており、多くの新鮮な食材が手に入るため、持ち味を生かしたいろいろな調理法が発達してきました。生やさつと火を通すだけで食べることを好み、食材そのものの食感を大切にしています。食感にこだわりがあるからこそ、食感表現が多彩になり、数が多いのではないのでしょうか。

これらの多彩な食感表現は、実際に食感評価に使われています。評価をする評価員は五感の試験をパスした人たちで、食材から受けた感覚を言葉や数値で表し、その結果は品質管理や商品開発などに役立てられています。また、評価員がより厳密な評価を行う方法の開発も進められています。

2013年、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されました。日本人の食生活や食文化のみならず、食感に対するこだわりも世界中の人々に伝えたいものです。